Takashima Toujyu Kai

会報

高島藤樹会

No.6
2014.9.12

（題字は、竹脇曇卿先生によるものです）

発行
NPO法人 高島藤樹会
〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1
電話・FAX 0740（32）4156

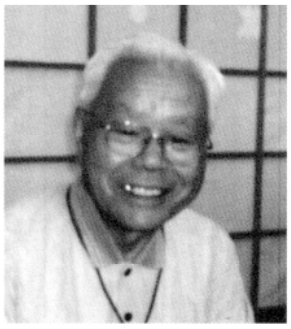
生涯を賭けて「藤樹研究」の基礎を作った男 「岡田季誠」の偉業に学ぶ

萬木 甚一良

青柳の東医院の玄関脇に「岡田季誠先生屋敷跡」と書かれた石碑がひっそりと建っています。

この岡田季誠という方は、どんな人であったかを知る人は少ないと思います。今「藤樹研究」の基本的資料としては「藤樹先生全集（全五巻）がありますが、この大部の基本的資料を提供してくれたのが、岡田季誠が編集した「藤樹先生全書」なのです。

岡田季誠は、東万木村（現青柳）で、父、仲実、母、美津（熊沢蕃山の妹）の次男として生まれ、幼少より学問を好み、常省先生（藤樹先生三男）の手で元服式を挙げたと言われています。長じて亡き藤樹先生の学問を後世に残すために、先生の書簡、遺文、手紙や書を集めて「藤樹先生全書」としてまとめ、藤樹先生の高弟であった泉仲愛、加世季弘等（いずれも備前藩士）に校閲を受け、当時、対馬藩江戸屋敷に賓客として滞在されていた常省先生に「序文」を依頼するため送付したのです。ところが折り悪く江戸の大火で対馬藩屋敷も類焼し、季誠が十七年もかけて蒐集した文書のすべてを灰塵に帰してしまったのです。季誠の落胆はいかがなものであったろうと思われますが、彼の偉かったところは、たいていの人ならここであきらめて止めてしまおうというところを、再び今一度蒐集をしなおそうと考え、それから二十七年をかけて第二次の「藤樹先生全書」をまとめるのであります。すでにこの仕事を始めて四十一年たっていました。今度は序文を三輪執斎先生に再三依頼して仕上げたのです。



大正十一年（一九二二年）藤樹神社の創建記念事業の一環として「藤樹先生全集」（全五巻）の編集刊行を加藤盛一先生（高知高等学校教授、元今津中学校長）を主任として八年かけて完成しますが、その本の基本的資料として、季誠の「藤樹先生全書」から多く採用され、また、藤樹頌徳会が発行した「藤樹先生年譜」にも多くの資料が採用されています。

このように、今日、藤樹先生のお教えが連綿として受け継がれていますことは、その陰に「何としても先生のすばらしい学問を後世に残したい」と尽力した岡田季誠の情熱と力によるところが多いと思います。

季誠は私たちに「人間として生まれたからには、自分の生涯を賭ける仕事を持つことの大切さ」を語りかけているものと思います。

ひじりの声

上田 藤市郎

古代中国で戸数をまとめる単位として、五戸を隣、五十戸を里、五百戸を党、一万二千五百戸を郷といったらしい。隣組、古里、故郷という語を思い浮かべ納得する。

藤樹先生が立志に至った「大学」によれば、世の中をよくするには個人の生活態度、生き方が出発点であって、その誠意が周囲の人々に好影響を及ぼして社会がよくなるという。

犯罪の防止、環境浄化、ごみの減量化なども、市民ひとりひとりが誠実に実行することが大切です。

周囲の人々を思いやり慈しむ「仁」のこころがけを、私たちは比較的身近な家族や親戚に対しては実践しやすいが、隣人、村里、郷里と範囲が拡大するにつれて実行力は弱くなりがちである。

例えば、「ごみの減量化」への取り組みも、自分の家庭や里（在所）では真剣に考えるけれども市全体への協力となると弱い。

高島市の戸数は一万五千戸、つまりはひとつの郷（さと）である。市のために尽力する行政や職員に協力し、せめて「仁」思いやりの心を、郷（さと）にまで広げて役立つよう実践したいものである。

高島藤樹会活動の一コマ

平成二十六年度 総会・講演会の開催

六月十四日、エルブライド寿光苑において、総会並びに講演会を、百四十四名（出席五十二名、委任状九十二名）の参加を得て盛会裡に開催することができました。

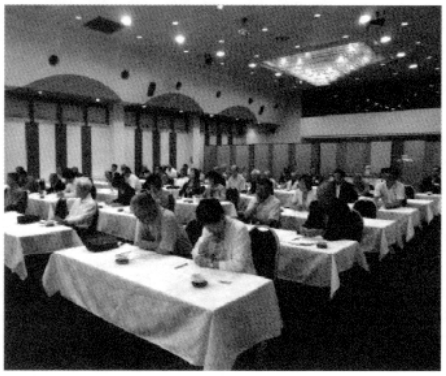
●平成二十六年度総会

川越清司会長の挨拶の後、小多偕裕さんが議長に選出され、議事に入りました。はじめに平成二十五年度の事業報告と決算関係並びに監査報告が承認されました。

次の役員選出については、現理事の留任と、川越会長・北川暢子副会長の再任を決定しました。もう一名の副会長など他の役員の選出は、理事会に委ねられました。

続いて平成二十六年度事業計画及び予算が報告されました。その後、北川副会長から、教材委員会の紙芝居の制作やその活用について報告いただきました。

川越会長の挨拶



平成26年度総会の様子

●講演会

・講師　滋賀大学准教授

横山　幸司　先生

・演題「**生涯学習のまちづくり**」

（次は、私のメモの抜粋です。）

・「生涯学習によってまちづくりを担う人をつくっていく」＝「生涯学習のまちづくり」

・恵那市生涯学習のまちづくりの事例

①拠点として生涯学習まちづくりセンターの創設　②郷土の先人「**佐藤一斎の三学の精神**」に学ぶため恵那市民大学「恵那三学塾」を創設

・地域の先人に学ぶことを、市の政策として発展してほしい。

佐藤一斎の三学の精神

少にして学べば、則ち壮にして為すあり。
壮にして学べば、則ち老いて衰えず。
老いて学べば、則ち死して朽ちず。

（新旭公民館の1Fに掲げられています）

平成二十六年度の役員決定

（第三回理事会の報告）

七月十四日、安曇川公民館において第三回理事会が開催され、総会で委ねられた役員選出も主要議事となりました。

このところ本会の運営は事務局会議に負うところが多かったことから、本来的なあり方を求めて、「それぞれが担当を持つ常務理事」による会議で運営していくことになりました。

役員は次の通りです。常務理事の（　）内は、担当内容です。（敬称略）

会　長　川越　清司
副会長　北川　暢子・小多　偕裕
常務理事　石田　弘子（心のセミナー）
〃　足立　清勝（教材）
〃　多胡　賢（表彰）
〃　田中　清行（事務局長・学習）
〃　三田村治夫（広報）
理　事　上田藤一郎・弘部　健次・飯田　典子
〃　清川　貞治・高谷美智子・三田村弘子
〃　小林　忠伸・高橋　志郎・清水　鉄次
〃　深川　澄雄・徳丸　和枝
監　事　古谷　芳實・山本　義雄
顧　問　久保田暁一・萬木甚一良
〃　松本孝太郎・白井　則茂

（M・H）

新教材に移ります！

田中　清行

藤樹人間学学習会では、約二年半かけて『翁問答』（現代語訳）を教材に藤樹先生の「孝」の思想を学び共に話し合って来ました。その『翁問答』がいよいよ終わりに近づきましたので、次の教材をお知らせします。

新教材は、中江藤樹原著・西晋一郎通解『大学解』です。（写真・少し廉価でご用意します）

『大学』は、四書の始めです。この『大学』について先生が晩年の四十歳の時、解釈文として出されたのが『大学解』です。それを昭和十四年に西晋一郎先生が現代文で解説されています。藤樹先生の円熟された思想を共に学び、日々の生活の中でいかに生かして行くか等について話し合ってまいりたいと思います。

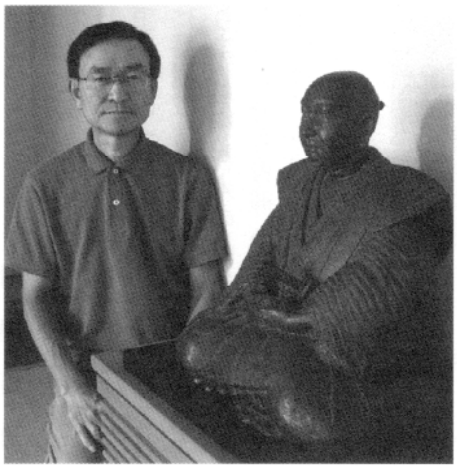
皆さまどうぞご参加ください。お待ちしております。

藤樹先生座像制作と現在の私の妄想

弘部　誠

昭和五十四年、小生二十九歳の時、写真の藤樹先生座像を制作。動機については、以前「松下亀太郎先生追悼集」に寄稿しましたように、「近江の先覚者シリーズ7」の「特別展中江藤樹」開催時の県立琵琶湖文化館での松下亀太郎先生の講演を聴いたことが出発点でした。

次の年の昭和五十五年にブロンズ（銅）像として、藤樹書院に置かれることとなりました。もう三十四年前となります。



当時、彫刻表現とともに考証した点は、書院蔵掛け軸の藤樹先生肖像は、絵画としての表現上、お顔の方向と体の向きを変えてあり、それを立体化のなかで全面的に正面向きに表現し直すこと。次に、江戸時代の中国絵画の影響による人物表現、例えば、やや釣り目の表現を抑えること。また、先生が喘息の持病があったことから、やや前かがみにすること。そして、刀を売って酒を買い、商売をされたとのことから、刀をより短いものにするなどでした。

この像制作後、等身大の藤樹先生座像を作り始めましたが、別の土地への我が家の建て替えがあり、粘土原型の移動が困難で、やむなく壊すことに。幻の等身座像となってしまいました。

けれども、行く行くは、藤樹先生の生涯における節となる場面のイメージを、彫刻として形象化したいと思っています。

ちなみに、自分なりに印象に残っている藤樹先生像は、もちろん玉林寺にある石本暁海氏作の木像、そして、彫刻家・森大造氏の木像（琵琶湖文化館所蔵）である。2つの作品とも、藤樹先生の真摯な人柄から発せられるエネルギーが感じられる名品です。完成度の点から、本庄小学校の石像もよいと思います。

シリーズ③ **「伝え継ぐ藤樹先生」**

また、私が教員として初めて赴任したころ、用務で訪れた有名な豊郷小学校の校舎（当時）玄関の入ってすぐ右手に、藤樹先生座像が置かれていました。湖東の教育現場にも藤樹先生とその像が大切にされてきたことに深く感動したものでした。

さて、藤樹先生座像制作以後、関連する制作を依頼されることになりました。木村光徳先生のレリーフ（中江藤樹記念館）、松本義懿先生レリーフ（安曇川中学校体育館玄関）、藤樹賞記念品の藤樹先生レリーフです。浅学な小生にとっては誠にもったいないことですが、光栄なことでした。

最近は、差し出がましいことなのですが、熊沢蕃山が、毎年、亡くなる前まで維持修理費として藤樹書院に私費を出していたことにヒントを得て、小ぶりの藤樹先生座像を作って良知館などで販売してもらい、収益の何割かを公益財団法人藤樹書院に自動的に入るようにできればいいなと、ずいぶん勝手な妄想を抱いています。

～藤樹書院だより～

藤樹先生のご命日に当たる九月二十五日（木）午後二時より、書院にて儒式祭典が執り行われます。会員の皆様のご参加をお待ちしております。

（連絡先 藤樹書院 〇七四〇-三二-四一五八）

「藤樹像を求めて」①

松本孝太郎先生から、「日野小学校に、藤樹像がある」とのお話をお聞きし、八月二十日に川越会長と高橋理事（日野町長と同級生）と共に、日野町に向かいました。

先ず訪れた日野小学校（北川昌美校長）は、創立百四十年を超える伝統校で、同窓会で維持管理されている多くの老庭木に包まれた落ち着いた学校でした。その校庭の中央部に、藤樹先生の銅像が立派な台座の上に建てられていました。

この銅像は、当校創立百周年に古稀を迎えられた高田徳左衛門さん（大正十年卒業）から寄贈されたものです。今から四十年以上も前のことでした。この台座の正面には『**永遠の師表 近江聖人中江藤樹先生**』と、大きく書かれていました。

さらに驚いたことに、和室には「致良知」の額が掲げられているとのこと……。

（次号に続きます。三田村治夫）

寄稿　会員のひろば

「私の藤樹先生との出会い」

清川貞治

私と藤樹書院や藤樹神社の関係は、昭和五十九年青柳小教頭を拝命頂いた中で、新校舎建築準備と共に藤樹教育推進に努める事から始まりました。朽木の故、柳生正雄先生から自分も青柳小を振り出しに藤樹教育について勉強した事をご指導下さいました一言は、『清川君は毎朝青柳小へ出勤するんだし、青柳から帰宅するんだから、むずかしいことは考えず、藤樹神社に向かって「おはようございます。」「今日も一日お守り下さいまして有難うございました。どうぞ明日もお守り下さい……。」と毎日唱えて、頭を下げるようにしなさい。』と……。立志祭や大洲小学校との交流、「三尺の泉」の校舎前庭の生水、地元のPTAの方々や藤樹規、致良知の卒業記念品の印刷木版画刷り、「知行合一」「当下一念」等の論語文の解釈、下がり藤の謂、地元ライオンズクラブの年間行事参加、大洲小・中・高校の上がり藤の謂、中江の水、……等、色々勉強させて頂きました。

物静かで、優しさを与えて下さいました地元の方々、新しい生き継ぐ道を貴賓室に保管しました。プレハブ校舎移転作業交えて三年間、収穫祭に上げた風船の旅が東宮御苑に落ち、金せん花、マリーゴールド、サルビアの種が皇后陛下の目にとまり、八木女管長よりお便りを頂き、全校喜び……忘れられない想い出の一ページでした。

あれから三十年余り、あっという間の経緯ですが、藤樹先生の偉大な陽明学を学び乍ら、玉林寺、書院等いっぱい良知の心の体得が青柳の里に存続していくよう共々祈るこの頃です。

書院儒式祭典（9月25日）

藤樹少年像
（青柳小学校）

安曇川と鴨川に挟まれたデルタ地帯にある校区は、農村地帯であるが扇骨業の地場産業も盛んである。しかし現在では県内外へ通勤している人々が多い。また、宅地開発が進み転入者も増加している。

わが国の陽明学の祖である中江藤樹先生の生誕、終焉の地でもあり、学校の周辺に「藤樹書院」をはじめ藤樹先生ゆかりの史跡や施設も多く、安曇川町では、この地域を「歴史・文化ゾーン」として生涯教育の町づくりの諸施策を実施してきた。

中江藤樹先生を生んだ環境の中にある本校は、藤樹先生の「良知に生きる」を基盤とした学徳と求道の精神を教育の中核に位置付け、徳知体の調和のとれた新しい時代を生き抜く人間性豊かな子どもの育成を目指して教育実践に取り組んでいる。

滋賀県高島市立
青柳小学校

「私の藤樹先生との出会い」

高谷美智子

今から二十九年前、大阪から越してきた頃に湖西線の車窓から見えた銅像、それが私と藤樹先生との出会いでした。

気になりながらも十年ほど過ぎた頃、安曇川中学校に勤めることになりました。当時、藤樹先生の映画を撮影されていて校内でも上映されました。その時、あの銅像が藤樹先生だと知ったのです。

そして、短い生涯にこんなに多くの人達に人生の師と尊敬されて、その教えが今まで受け継がれていることに驚きました。

道徳的なことは敬遠されがちなものですが、藤樹先生は自身の人柄や生きていく態度によって、相手に様々な気づきを与えていることに感動しました。

今でも藤樹先生に学ぼうと市内の小学校で立志祭が行われています。幼いうちから藤樹学を学ぶことのできる高島の子ども達は、今は理解しなくても社会に出てから素晴らしいことに気づき、生きる支えにするかもしれません。

微力ですが私も教材委員会で紙芝居の制作に加わらせてもらい、子ども達の心の成長に協力できればと思っています。

「五事を正す」この教えに出会えたことは、とても幸運でした。嫌なことがあった時、相手を責める気持ちになった時、「五事を正す」を思い浮かべて考えてみます。

反省するところが見えてきます。奥の深い藤樹先生の教えですが、常に心がけていこうと思います。

「了佐てらこや小学校」

藤樹先生に学ぼう

夏休みに入ってしばらく経った七月二十九日、今年も近江聖人中江藤樹記念館で「了佐てらこや小学校」が開校されました。

藤樹先生の門人で、人一倍努力して名医となった大洲出身の大野了佐にならい、入校を希望した市内の小学生に、わが国古来の学習法である「読み」「書き」の大切さを体得させたり、ものづくりをとおして工夫や努力することの大切さを学んでもらおうとするものです。

▼参加児童
小学三年生～六年生
三十二名

開校式で、子ども達は姿勢を正し、緊張感をもって臨めていました。

▼授業内容
①七月二十九日（火）
開校式・論語の素読・習字（基本練習）・科学実験（静電気など）
②七月三十日（水）
論語の素読・習字（基本練習）・科学実験
③八月五日（火）
論語の素読・習字（基本練習）・新聞紙のバッグづくり

『大きな声での論語の素読は、脳によい響きを与え、活性化する』（西川先生）

④八月六日（水）
論語の素読・習字（手本の錬成）・折り紙（カワセミなど）
⑤八月七日（木）
論語の素読・習字（手本の錬成）・落款印づくり
⑥八月八日（金）
論語の素読・習字（作品仕上げ）・修了式

▼指導者
西川守彦先生が中心に指導、澤井千晶さんと中村淳子さんがお手伝いされており、横井正館長をはじめ記念館の職員の方々も科学実験やものづくりを指導されていました。

学年に応じた手本をもとに、作品作りに励んでいました。

▼修了式では……
藤樹先生頌徳歌を斉唱した後、横井館長から一人一人修了証をいただきました。どの子も笑顔で、満足気な表情であったことが印象的でした。最後の一人一人の感想発表にも充実感を窺えました。
『みんな日に日に仲良くなり、お世話やきの子が増えてきました』と西川先生がおっしゃったように、異学年での学びの良さが示されたのでしょう。来年も定員オーバーで賑わうことと思います。

（三田村治夫）

観てみませんか……
映画『近江聖人 中江藤樹』

上山基継

藤樹先生のお名前とあかぎれ膏薬の話しか知らない私に、中江藤樹記念館の館長を命ぜられた時は、かつて経験したことのないプレッシャーと不安が私を襲いましたが、そこから逃げる訳にはいかず、とりあえず〝大筋〟で藤樹先生を知ろうと購入したのが、映画『近江聖人 中江藤樹』でした。その映画に大変感動し感銘を受け、記念館に着任する日までに五回観ました。結果、プレッシャーや不安が払拭され、学問や歴史的なことなど難しいことは今は知らなくても、この映画から、「人として生まれたからには人らしく美しい心を発揮して、みんな仲よく助け合って生きる」ということを来館者にお伝えできればいいのだと、不思議なほど自信が湧いてきたのを覚え、本当に有難かったです。

モラル崩壊や純粋な心を失いつつある現代社会。悲しいかな、それに似たことが藤樹先生生誕の高島でも起きているのは、何とも居たたまれない。こんな時こそ、今一度、映画『近江聖人 中江藤樹』を観てみませんか、広めてみませんか。

藤樹記念館通信

人物藤樹と藤樹心学を広めた門人

近江聖人中江藤樹記念館長　横井　正

中江藤樹の門人は百人余いたが、岡山藩・大洲藩や近江国の藩士が多数を占めていました。それでは、どのようにして藤樹心学が全国に広まったのでしょうか。それに寄与したのは熊沢蕃山と淵岡山です。

蕃山は、藤樹の門人として約八ヶ月間教えを受け、藤樹心学の心髄を体認しました。その後、備前岡山藩で池田光政に仕え、大胆な藩政改革を行いました。後に陽明学者として名を馳せ、師中江藤樹とその教えが広く知られるようになりました。

熊沢蕃山

一方、岡山は、四年間藤樹の教えを受けました。藤樹の没後、大溝藩を介して、藤樹書院の解散命令が言い渡されました。岡山は、藤樹の葬儀を終えると、京都で藤樹の学問を講じました。そして一六七四年には西陣に祠堂を建て、学館を創設し、藤樹心学の普及に努めました。数百人の岡山の門人は京都・会津・大阪・美作・伊勢・江戸・熊本などで藤樹学派をつくり、藤樹学は全国に広がりました。

淵　岡山

現在、藤樹記念館では、上述の藤樹学の広がりを展示資料により科学的に検証していただきたいと思い、小企画展「双璧　熊沢蕃山・淵岡山」を開催中です。

（九月三十日まで）

賛助会員一覧

平成二十六年八月現在で、本会の賛助会員としてご加入いただいております法人は次の通りです。

○ウェストレイクホテル可以登楼
○株式会社　大山建設
○株式会社　桑原組
○有限会社　白浜荘
○社会福祉法人　新旭みのり会
○株式会社　TADコーポレーション
○鉄屋商事　株式会社
○とも栄藤樹街道本店
○中村印刷　株式会社
○ニッケイ工業　株式会社
○有限会社　馬場塗装
○有限会社　綿庄食品店

（五十音順）

お知らせとお願い

★高島藤樹会のホームページを一度ご覧ください

本ホームページは、広報担当理事の深川澄雄さんによって作成され、更新していただいています。「NPO法人高島藤樹会」で検索していくと、トップページが開きます。インフォメーションや新着情報が載せられています。続いてのページは「中江藤樹」で、藤樹先生の経歴や略年表が記されています。以下、「藤樹書院」「活動内容」「良知館」のページで構成されています。

★寄稿や会報についてのご意見をお寄せください

当会報の発行は、五月、九月、一月の年三回を予定しています。少しでも読みやすく、親しみのもてる内容で、しかもグレードの高い会報にするために、ご意見をお寄せください。

また、『会員のひろば』コーナーでは、「心温まるお話」や「私の藤樹先生との出会い」といったテーマで寄稿をお待ちしています。

三田村治夫（広報担当）宛
TEL・FAX 0740-25-2246
e-mail：mitamura.haruo@ruby.plala.or.jp

あとがき

わが子を守る　キジに学ぶ！

今年の夏はこれまでになく雨が多く、蒸し暑い日が続きました。畑の草も競争するように伸びていきます。七月のはじめ頃だったでしょうか。草刈り機を使っていると、隅の草の中に二個の卵が並んだ巣を見つけましたが、なぜか親鳥はいませんでした。

五年ほど前にもこの同じところに巣がありました。その時は、機械で草を刈っているといきなり激しく雌キジが飛びかかってきて、驚いて後ずさりしてもキジは引き下がろうとしません。たじたじで一〇mほども退き、草刈り機をおいてゆっくりその草むらに近づくと、そのキジが巣に座り込んでこちらをにらみつけていました。そう言えば、先ほど三～四m東側で大きな蛇が頭を潰されて死んでいた訳も、私にあれほど激しく立ち向かってきた訳も分かりました。巣には、可愛い雛がいたのでしょう。

一方人間社会では、昨年、児童虐待の件数は七万三、七六五件（前年比一〇・六％増）で過去最悪、面前DV（子どもの面前でのDV）被害児童は八、〇五九人で、これも過去最悪とのこと……。

（H・M）